

ロージャー・ウィリアムズとクエーカー教徒との対立

久保田 泰 夫

基礎教育課程

On the Debate between Roger Williams and the Quakers

Yasuo KUBOTA

Division of the Fundamentals of Arts

(Received October 31, 1995; Accepted January 10, 1996)

This paper attempts to discuss several historical and theological points concerning the debate which took place in August 1672 between Roger Williams, Founder of the English Colony of Rhode Island and a champion of church/state separation, and the three stalwart Quakers deputed the leader of their sect, George Fox. Rhode Island had established the principle of religious toleration two decades earlier and accepted the Quakers in its jurisdiction, who were barred from the neighboring colonies. It was becoming a stronghold of Quakerism in New England. When George Fox visited Rhode Island to spread their faith there in the middle of 1672, he was challenged by Roger Williams to a debate but had left Newport shortly before the letter of challenge was carried there. Fox's untimely departure was condemned by Williams as a sneaky intrigue to evade the proposed debate. The frustrated Williams had a heated four-day debate with Fox's three disciples, John Stubbs, William Edmundson, and John Burnyeat (replaced by John Cartwright on the last day). An almost verbatim record of the debate was published by Roger Williams in a lengthy book sarcastically entitled *George Fox Digg'd out of his Burrowes* (Boston, 1676). In response to this criticism, Fox co-authored with John Burnyeat and published a book with a similarly sarcastic title *A New-England Fire-Brand Quenched* (London, 1678). The debate on the fourteen points proposed by Roger Williams, as recorded in the books, seems to reveal some characteristics of his religious ideas and also of his frame of mind in his late years. He pursued tenaciously his verbal attack on what he considered was wrong with Quakerism, while there was no persecution of the Quakers for religious reasons in Rhode Island; where, by the laws and regulations enacted on the basis of Roger Williams's thought, the religious and secular affairs were distinctly kept separate.

1. 序 論

本稿は、英領ロード・アイランド植民地の創設者で信教の自由の唱道者・実践者であったロージャー・ウィリアムズ Roger Williams (1603-83) が、現存する最後の著書 *George Fox Digg'd out of his Burrowes* (Boston, 1676) の中で、当時のクエーカーの教義に関して展開した痛烈な批判と、それに対して、クエーカー派の総帥ジョージ・フォックス George Fox (1624-91) が反論として弟子のジョン・バーネット John Burnyeat (1631-90) と共著で出した *A New-England Fire-Brand Quenched* (London, 1678) に顕われた、両者の思想上の対立を巡る若干の問題を考察し、併せてロージャー・ウィリアムズの晩年の動向、及び、既に17世紀の半ばに信教の自由を

制度的に確立してクエーカー教徒を受け容れていたロード・アイランド植民地の状況の一端を探ろうとするものである¹⁾。

上のウィリアムズの著書の題名は、フォックスとその協力者エドワード・バロー Edward Burrough (1634-63) の名をもじった風刺で、『^{バロー}巢穴からつまみ出されたジョージ・^{フォックス}狐』の意味となり、ウィリアムズのクエーカー派に対する不信感を象徴している。これに対するフォックスとバーネットの共著の題名も風刺的で、意味は『ニュー・イングランドの危険な火種は消し止められた』となる。この「危険な火種」はウィリアムズを指している。

なお、「クエーカー (“Quaker”)」の名は、ウィリアムズも指摘しているように、1650年、英国ダービーシャーの判事ジャーヴィス・ベネット Gervase Bennet が蔑称

として付けたと伝えられているもので、この宗派は正確には「フレンド派 (“Society of Friends”）」と呼ぶべきであるが、本稿では、多くの研究者の論考に倣い、ロージャー・ウィリアムズが論戦で用いている「クェーカー」の名称をそのまま踏襲することとする。

2. 英領ロード・アイランド植民地とクェーカー教徒

ロード・アイランド植民地は、1663年7月8日付のチャールズ二世の特許状で住民に信教の自由を保障しているが、それより20年前の1643/44年3月14日にロージャー・ウィリアムズが殆ど独力で英本国の議会政権から得た特許状に基づいて現地で制定した諸規則によっても、信教の自由と政教分離を制度として確立していた²⁾。この植民地は、北米大陸本土上のプロヴィデンスとウォリック、及び、ナラガンセット湾内のロード島（ロード・アイランド）にあるポーツマスとニューポートの四つのタウン（自治集落）で構成されていたが、最も古いプロヴィデンスはロージャー・ウィリアムズが創設したタウンである。彼は、強固で不寛容な神政政治に邁進するマサチューセッツ植民地政権を批判したため、危険人物と見做されその管外に追放されたが、以前から親交のあった原住民の族長から譲られていたナラガンセット湾の奥の土地に、1636年、数十名の仲間と共に移り住み、その集落をプロヴィデンス（Providence「神の摂理」）と名付けた。その統治方法についてウィリアムズは、彼の才幹を認めていたマサチューセッツ植民地初代総督ジョン・ウィンスロップ John Winthrop (1588-1649) に実務的助言を求めつつ構想を固め、持論である「信教の自由の保障」と「政教分離」を現実に法制化した。それを証明するのは、プロヴィデンスのタウン統治機関である家長会議の権限を「宗教を除く世俗の事項に限定する (“only in ciuill things”）」旨を明記し、13人の独身成人男子が服従の署名をした誓約書の存在である。家長会議そのものの規約は残っていないが、ウィリアムズのこの理念が、その後設立されたタウンを加えたロード・アイランド植民地の政治体制の原点となった³⁾。

ロード島（当時はアクイドネット島と呼ばれた）に最初に入植したのは、ウィリアムズより約1年後にマサチューセッツ植民地政権によって不穏分子として退去させられた戒律不要論者 Antinomians である。彼等はロージャー・ウィリアムズの斡旋でナラガンセット族からこの島を1637/38年3月に譲り受け、ポーツマス・タウンを設立した。その中には、戒律不要論者のリーダー格のアン・ハッチンソン夫人 Mrs. Anne Hutchinson (1591-1643)、後にチャールズ二世の特許状の取得で功績のあったパプ

ティストの牧師ジョン・クラーク医師 Dr. John Clarke (1609-1676)、マサチューセッツ植民地政権の内部で総督補佐官 (Assistant) という閣僚級の要職を務めた経歴のあるウィリアム・コディントン William Coddington (1601-1678) などの有力な人物がいた。コディントンは僅か1年後にポーツマスから分れて、同調者と共にロード島の南端に新しいタウンを開いたが、これがニューポートである。ロード島は地味が肥沃で、海に囲まれていたため家畜の放牧にも安全で、その中心地ニューポートは貿易港として恵まれた条件を備えていた⁴⁾。コディントンは個人的野心からロード島を私有化しようとしたが、この企ては、植民地の自律的存続を切望する住民の興望を担って英本国に赴いたロージャー・ウィリアムズとジョン・クラークの多年の奔走で阻止され、ロード・アイランド植民地は、チャールズ二世の特許状により自律的存立を確固たるものとし、アメリカ合衆国独立後は、ロード・アイランド州として現在に至っている⁵⁾。

コディントン一派が開いたニューポートは、軍港や保養地として知られているが、当時も、上に述べた地理的な条件に恵まれていたため、本土上のプロヴィデンスとウォリックを合わせたよりも大きな人口と経済力を有していた⁶⁾。ロード島に最初に入植した戒律不要論者は、過激なリーダーであるアン・ハッチンソン夫人に代表されるように、自分達は「恩恵の契約 (Covenant of Grace)」の許にあり、神の一方的な恩恵によって選ばれて魂を救われ、聖霊 (Holy Ghost) を直接授けられている、という主観的で自己中心的な思想を持っていた。彼等の思想の中心である「恩恵の契約」は「業の契約 (Covenant of Works)」と対比される。「業の契約」では、魂の救済の条件として、神への服従、すなわち、現世においては戒律を守り善行を積むことが必要とされる⁷⁾。しかし、戒律不要論者は、このような「業の契約」の許にあって、戒律の遵守や善行の蓄積など自己の人間としての所業によって魂を救われると信ずる者は永遠に救済される望みはないと断定し、しかも、マサチューセッツ植民地管内の聖職者のうちで「恩恵の契約」の許にあるのはジョン・コットン John Cotton (1584-1652) (マサチューセッツ神政政治のスポークスマンでロージャー・ウィリアムズの論敵だが、アン・ハッチンソンが英国在住中から師事し慕っていた牧師) とジョン・ホイールライト John Wheelwright (アン・ハッチンソンの義弟) だけで、他の聖職者は全て「業の契約」の許にあり、福音を説くには不適合だ、と唱えるに至ったのである。この極めて主観的・独善的と見做される「危険思想」がボストン教会の教会員や政権の幹部にまで浸透してきたことに危機感を持ったマサチューセッツ植民地政権はハッチンソンとその同

調者を退去させたのである⁸⁾。

この時から約20年の後「自己の内面の光 (Inner Light)」を教義の中核に据えるクェーカー教徒がロード・アイランド植民地に流入し、ニューポートの古い住民の中からも多数がこの宗派に転向した。そして、コディントンや、総督を務めたニコラス・イーストン Nicholas Easton などの有力者も1665年頃までにはクェーカー派になっていたとのことである。これは、クェーカーの教義が、この地域の第一世代の住民である戒律不要論者にとって受け入れ易かったことを示唆していると思われる。また、一方、本土上のプロヴィデンスに多数居住したバプティスト派の信者からもクェーカー派に転向する者が多かったとのことである。その理由の一つとして、両派は、教会組織の在り方、信者の内面における啓示の重視、信教の自由の希求と保持、神の名を妄りに唱えることになる宣誓の忌避、女性による説教の容認、などの基本的な考え方が類似していたことが指摘されている⁹⁾。

プロヴィデンスのバプティストでクェーカーに転向した人物の中で注目すべきはリチャード・スコット Richard Scott であろう。彼は最初ボストンに住み、ボストン教会の教会員だったが、ロージャー・ウィリアムズに従ってプロヴィデンスに移った。ウィリアムズの名をアメリカの政治思想上不朽のものにしたのは、“only in ciuill things”の一句によってプロヴィデンスのタウン統治機関である家長会議の権限を「宗教を除く世俗の事項に限定した」誓約書の存在であるが、この統治に服する誓約に署名した13人の独身成人男子の筆頭がリチャード・スコットである。また、この現存する文書の筆跡はスコットのもので、ウィリアムズの筆によるものではない、との研究報告もある¹⁰⁾。スコットの妻は、アン・ハッチンソンの末の妹で、この女性の強い勧めでロージャー・ウィリアムズは再浸礼を受け、一時バプティストになった、とスコットは言っている。このように、スコットは、プロヴィデンス入植以来、永年、ウィリアムズの隣人であったにも拘らず、後年、ウィリアムズを「名誉欲が強い (“That which took most with him...was, To get Honor amongst Men, especially, amongst the Great Ones”）」などの言葉で厳しく批判する文書を著し、その全文がジョージ・フォックスの『ニュー・イングランドの危険な火種は消し止められた』に掲載された¹¹⁾。

ロード・アイランド植民地にクェーカー派の人々が多数流入したのは、同植民地が信教の自由を保障していたからであることは云うまでもない。ロード・アイランドを取り囲むマサチューセッツ、プリマス、コネティカット、ニュー・ヘヴンの四つの強大な植民地は相互安全保

障のためニュー・イングランド植民地連合 The United Colonies of New England を結成していたが、盟主マサチューセッツ植民地政権は「管内に転入したクェーカー派の信者を神に対抗する魔王サタンの手先と見做し (“heer hath arived amongst vs seuerall prsons proffessing themselues quakers fitt Instruments to propagate the kingdome of Sathan”）」、その害毒を防ぐため (“for the Securing of ourselues and our Naighbours from such pests”）」逮捕・強制送還の措置をとり、1656年9月2日、ニュー・イングランド植民地連合理事会に対して、加盟各植民地も同様の措置を講ずるよう勧告することを要望した¹²⁾。同理事会は、この要望に基づき、直ちに加盟植民地の総会議に対して、「クェーカー派、喧騒派など悪名高い異端者の管内転入禁止令の制定 (“We doe... propose to the seuerall generall courts that all quakers Ranters and other notorious heretiques bee prohibited coming into the vnited Collonies”）」とともに「万一管内住民の間に転向者が現れた場合は監禁または管外退去させること (“if any shall heerafter come or arise amongst vs ...they bee forth with ceured, or remoued out of all the Jurisdictions.”）」を勧告した¹³⁾。2年後、更に弾圧の徹底を期すため、ニュー・イングランド植民地連合理事会は、投獄、追放、強制退去、体罰などを含む罰則を加え、再度転入を企てた場合は、教義を公衆の面前で放棄しない限り、改悛の余地なしとして死刑にする立法措置を講ずることを加盟各植民地に勧告した。同理事会の議事録のうち関連部分を示す。

it is... propounded and seriously comended to the seuerall generall Courts ... to make a law; That all such Quakers formerly convicted and punished as such shall (if they Returne againe) bee Imprisoned and forthwith banished or expelled out of the said Jurisdiction vnder paine of Death and if afterwards they prsume to com againe into that Jurisdiction then to bee put to death as presumptuously Incorragable vnlesse they shall plainly and publickly Renounce their cursed opinions...¹⁴⁾

この弾圧令によって犠牲者が出た。すなわち、マサチューセッツ植民地総会議は、この勧告に基づく法を制定・施行し、管内に立ち入りを企てた4人のクェーカー派の信者をボストン・コモン (共有地) の公開の場で絞首刑に処した。そのうちの一人メリー・ダイア Mary Dyre は、ロード・アイランド植民地政権で書記官長を務めたウィリアム・ダイアの妻であった。彼女は、20年前

にアン・ハッチンソンに従ってボストンからロード・アイランドに移ったのであったが、後に深くクェーカーの教義に帰依し、自ら迫害を求めてマサチューセッツに入り、1659年10月、死刑の宣告を受けた。一旦は家族の助命工作によってニューポートに帰され蟄居させられたが、敢えて殉教者の道を選び、翌1660年、再びマサチューセッツに潜入して逮捕され、同年6月1日処刑された¹⁵⁾。

3. ロード・アイランド植民地政権の態度

このような状況の中で、クェーカー派の信者を受け入れていたロード・アイランド植民地は、ニュー・イングランド植民地連合から、クェーカー派対策で同調するよう求められた。同連合理事会は、1657年9月12日付でロード・アイランド植民地総督宛てに書状を以って「管内居住のクェーカー派の排除と、同派の信者の転入禁止の措置をとることを要求するとともに（“Wee therefore make it our Request that you as the Rest of the Colonies take such order heerin that youer Naighbours may bee freed from that Danger; That you Remoue those quakers that have been Receiued and for the future prohibite their coming amongst you”）」、その返答を10月に開催されるマサチューセッツ植民地総会議に送付するよう要求してきた¹⁶⁾。これに対してロード・アイランド植民地が送った返書には、信教の自由を「国是」として堅持しつつ、近隣植民地との友好関係を維持するとともに、英本国政権の庇護の許で自律的存在を認められている事実を強調する外交戦略が見られる。当時の総督ベネディクト・アーノルド Benedict Arnold の署名した返書（1657年10月13日付）では、具体的方策は翌年3月の植民地総会議に諮って決めることとして最終的な態度の表明を先き送りする一方で、クェーカー派を宗教上の言論を理由に処罰することは法制上できない（“as concerning these quakers (so called), which are now amongst us, we have no law among us, whereby to punish any for only declaring by words, & c., their mindes and understandings concerning the things and ways of God, as to salvation and an eternal condition.”）、との態度を明らかにしている。更に、ロード・アイランド植民地ではクェーカー派の宗教活動に対する反論はあっても現地官憲による干渉・弾圧がない事実を指摘し、その結果、迫害に耐える姿を大衆にアピールすることで信者を獲得する目論見が外れたため、クェーカーの人々はロード・アイランドに来ることに魅力を感じなくなっている（“these people ... in this colony, are ... suffered to declare themselves freely, and are only

opposed by arguments in discourse, ... they begin to loath this place, for that they are not opposed by the civill authority,... they delight to be persecuted by civill powers, and when they are soe, they are like to gain more adherents by the consequence of their patient sufferings.”）と主張して、ニュー・イングランド植民地連合側の追及を躲そうとしている。しかし、クェーカー派の教義が広まれば、ロード・アイランドでも住民間の分裂と政治不安を招来する危険性のあることは認めている（“And yet we conceive, that their doctrines tend to very absolute cutting downe and overturninge relations and civill government among men, if generally received.”¹⁷⁾）。そして、翌年3月のロード・アイランド植民地（当時の名は「プロヴィデンス拓殖地」）総会議からマサチューセッツに送られた返書（1657/58年3月13日付）には、ニュー・イングランド植民地連合との直接対決を避けながらも外圧には屈せず、本国議会の特許状が認めた信教の自由の原則を堅持しようとする意志が表れている。関係部分を次に示す。

There hath beene presented to oure view ...a letter... concerninge a company of people ...commonly knowne by the name of Quakers, whoe are generally conceived pernicious, ... even to the corruptinge of good manners and disturbinge the common peace and societies of the places where they arise or resort unto, & c. Now, whereas, freedom of different consciences, to be protected from inforcements was the principle ground of our Charter, both with respect to our humble sute for it, as also to the true intent of the Honourable and renowned parleiment of England in grauntinge of the same unto us; which freedom we still prize as the greatest hapines that men can possess in this world.

Therefore, we shall for the preservation of our civill peace and order... take notice that those people and any other that are here, or shall come amongst us, be impartially required ... to perform all duties requisitt towards the maintaineinge the right of his Highness and the government of that most renowned Parliament of England in this collony, which is most happily included under the same dominion and graciously taken into protection thereof: And in case they the sayd Quakers... doe refuse to subject themselves to all duties aforesayed, as trayninge, watchinge, and such other ingadgements, as other members of civill societies, for the preservation of the same in justice and peace; then

we ...resolve... to take and make use of the first opportunity to inform our agent residing in England, that we may humbly present the matter (as... concerning the aforementioned people called Quakers) unto the supreme authority of England, humbly craving their advice and order, how to carry ourselves in any further respect towards these people soe, that therewithall there may be noe damage, or infringement of that chiefe principle in our charter concerning freedom of consciences, and we alsoe are soe much the more incouraged to make our addresses unto the Lord Protector, his highness and government aforesayd; for that we understand there are, or have beine many of the foresayd people suffered to live in England; yea even in the heart of the nation....¹⁸⁾

(筆者 試訳)

クエーカー派の問題に関するニュー・イングランド植民地連合理事会からの要望書を検討しました。この宗派の人々は一般に悪質で、転向者や転入者が現われた地域では、風紀を乱し、治安を妨害し、平穏な人間関係を崩している、と思われております。

さて、権力の強制を排し多様な信仰の自由を保障することは、我がロード・アイランド植民地を認可した特許状の基本原則・基盤であり、それを交付した英本国の議会の真意でもあります。この信仰の自由を、私たちは世界最高の幸福と信じて大切にしております。

それ故、私たちは社会の安寧と秩序維持のため、また、護国卿と誉れ高き祖国イングランド議会の主権をその版図と保護の許にある本植民地において維持するために必要なすべての義務の遂行を、クエーカー派を含む全住民に公平に要求するよう配慮しております。そして、クエーカー派の人々が、本植民地の正義と平和のために必要な義務である民兵教練、警備、及び、他の諸業務を、他の一般住民と同様に遂行するのを拒否した場合には、英本国駐在員に即座に訓令し、当該事項（前記クエーカー派関連）を本国の最高当局者に提訴し、本植民地の特許状にある信仰の自由の大原則に抵触せずにクエーカー教徒に対処する方法について助言と指示を請うことに決定しております。私たちが敢えて、本国の護国卿と政府に、この請願をすることに決めた理由は、この宗派の人々が多数英本国に（しかもその中心部にさえ）居住を黙認されているという事実であります。

上にあるロード・アイランド植民地の英本国駐在員は、特許状の再確認のため10年余り英本国に留まったジョン・クラーク医師である。その後、彼はロード・アイラ

ンド植民地から訓令（1658年11月5日付）を受けた。その内容は、クエーカー教徒の扱いに関するニュー・イングランド植民地連合からの内政干渉と経済断交の恫喝を本国政権に提訴し、その庇護を求めることであった¹⁹⁾。このように、信教の自由を標榜し実践していたロード・アイランド植民地では、クエーカー教徒の自由な宗教活動が認められていたが、一方、彼等の勢力が拡大するにつれて市民生活の領域では、種々の問題が起きていたのも事実と思われる。チャールズ二世の特許状が交付されて間もない1665年、英本国政府から派遣された使節団がロード・アイランド植民地を訪れた時、その年5月まで総督補佐官を務めたロージャー・ウィリアムズは、「本植民地の住民の中に植民地政権の統治に非協力的な人々がいるが、どう扱ったら良いか（“We have a People here amongst us, which will not Act in our Government with us; What Course shall we take with them?”）」と質問した。それに答えて、使節団の一人ジョージ・カートライト George Cartwright は、その住民の生活態度を訊ね、特に不穏な傾向を指摘する返事がないので「彼等に自治能力があるならば、植民地政権による統治の必要はない（“If they can Govern themselves, they have no need of your Government.”）」と言ったそうである²⁰⁾。これは、クエーカーに転向したりチャード・スコットがウィリアムズを批判して書いた事柄の一部である。本国使節のコメントは、ロード・アイランド植民地政権の統治に服さない一部住民に関するウィリアムズの憂慮を無視して、その住民の行動を是認しているように解釈できるが、この一団がクエーカー教徒なのである²¹⁾。ウィリアムズは、信仰（思想・言論）の世界と世俗（市民生活）の世界を峻別しており、信仰の自由とその多様性を認める寛容論の論客・実践者として、人間の魂の在り方に関わる信仰の世界に俗界の権力が介入することに強く反対したが、世俗社会の市民生活では安寧と秩序を重んじた。彼は、17世紀中頃のロード・アイランドのクエーカー教徒の行動に反社会的傾向が強く、それは彼等の信仰の基軸とされる「心の内に在る光“the Inner Light”」の恣意的性格に由来すると考え、彼等の教義そのものに強い疑念を懐いていた。ウィリアムズは、人間の信仰は神の言葉とされる聖書に基づくべきものと信じており、その聖書よりも自己の「内面の光」を上置くクエーカーの教義を高慢・独善的で神を冒瀆するものとして攻撃したのである。

4. ジョージ・フォックスの ロード・アイランド遊説

クエーカーの宣教師としてロード・アイランドを最初

に訪れたのは、『ニュー・イングランドの危険な火種は消し止められた』をフォックスと共著で出したジョン・バーネットである。バーネットは1653年にフォックスの弟子になっていたが、1666年、ニューヨークを經由して初めてロード・アイランドに来た。翌年春、彼はバルバドス島の英領植民地に向い、秋には英本国に帰った。1670年、彼は再び英本国を発ち、バルバドス島、ニューヨーク、ロング・アイランドを経て、翌1671年、再びロード・アイランドに来て、プロヴィデンスにも赴き、各地でクェーカー派の信者の集会を訪れた。彼はこの旅の途中でフォックスに出会っている。

クェーカー派の総帥ジョージ・フォックスは、出獄後間もない1671年8月、布教のため12名の随員と共に英本国を出発し、アメリカ各地の英領植民地への遊説に旅立った。一行の中には2人の女性と、後にニューポートとプロヴィデンスでロージャー・ウィリアムズと論戦で直接対決することになるウィリアム・エドモンソン William Edmundson (1627-1712) とジョン・スタブズ John Stubbs が含まれていた。フォックスの一行は、先づ西インド諸島のバルバドス、ジャマイカに向かい、そこから北米大陸のメリーランド、今はニューヨーク州の一部になっているロング・アイランドを經由して、ロード・アイランド植民地にも来たが、一行は各地で男女別に信者の集会を組織し、教義の徹底だけでなく信者の素行の善導にも意を用いた。例えば、バルバドスでは、男性の集会で着帽のまま礼拝に出る者を戒めたり、女性の集会では、既婚女性に関係を迫るような男には断固とした態度をとること、などを説いている。クェーカーの教祖として、フォックス自らが集会でこのようなことを説き聞かせたという事実は、ここに指摘された不作法、不品行が信者の間に蔓延していたことを示唆していると解釈できる。クェーカー派の人々については、新興の宗派でもあり、世俗の市民生活の面でも各地で相当の批判に曝されていた。同じバルバドスで、クェーカー派の人々は防衛費を公平に負担していないとか、地元の他宗派の聖職者を欺瞞的だとして軽蔑しその教会の礼拝を妨害した、などと非難された。特に、重大な問題と見做されたのは、奴隷の集会を催したことで、これは奴隷の反乱を教唆したものと誤解され、非難を浴びたのであった²²⁾。フォックスはこれらの非難を解消するために苦闘したが、彼の説教そのものは評判が良かったようである。フォックス自身の日誌に、遊説先の各地で「判事 justices of the peace, 議員 assemblymen, 軍の士官 military officers, 総督 governor」など指導者層を含め、多数の他宗派の人々が彼の説教を聞くために集まった、との記述がある²³⁾。

フォックスの一行は1672年5月30日にロード・アイラ

ンド植民地に到着し、総督に選任されたばかりのニコラス・イーストン Nicholas Easton のニューポートの家に迎えられた。以後、イーストンはフォックスに同行して、プロヴィデンスからナラガンセット湾西岸地域を巡回したが²⁴⁾、これはイーストンの心酔振りを象徴している。

ロード・アイランドでは、フォックスの催す集会に近隣の他の植民地からも多数の参加者があり、クェーカー派でない多くの人も出席したとのことである。彼は、その理由の一つとして、「ロード・アイランド島には聖職者が存在せず、信仰上の制約もない(“they having no priest in the island, and so no restriction to any particular way of worship”）」ことを指摘している。また、フォックスがプロヴィデンスに赴いて集会を催した時のコメントとして「この地の人々は聖職者よりも見識が高く、一部には論争のために来た人もいた(“they were generally above the priest in high notions; and some of them came on purpose to dispute”）」ので集会を平穩に進める自信が最初はなかった」という記述がある²⁵⁾。このようなフォックスの感想は、ロード・アイランド植民地の住民が信教の自由を保障され、信仰について議論・意見交換をする言論の自由を享受していることを部外者の立場からも認めているものと解釈できる。

フォックスは、ロード・アイランド植民地では、新総督ニコラス・イーストンに厚遇されて信者の集会も成功した。また、植民地政権幹部の間でも信奉者が多く、資金の目途が付けばフォックスをこの地の牧師に任じようとの運動もあったが(“they would hire me to be their minister”), 彼はこの勧誘を「クェーカー教の本質に関する認識不足と決め付けて(“This was where they did not well understand us, and our principles”）」辞退し、この機会にロード・アイランドを離れる決意をした。その理由は、フォックスの言葉では、「金で牧師を雇うことは多くの信者を墮落させ、信者が自ら才能を磨く妨げになるからであり、我々クェーカーの牧師の仕事は、信者を各人の心の内に在る尊き師に出会わせることだからである(“For this thing (hiring ministers) had spoiled many, by hindering them from improving their own talents; whereas our labour is to bring every one to his own Teacher in himself.”))」となっている²⁶⁾。ここで、フォックスは金で雇われた牧師の適格性を否定しているが、この見解はロージャー・ウィリアムズの著書『雇われ牧師論』*The Hireling Ministry None of Christs* (London, 1652) の主張と共通する面がある。この本の主旨は、ピューリタン革命期の議会政権支配下の英本国における教会制度の許で安住していた聖職者への警告であった。聖職禄と栄達に執着する牧師には真の魂の自由はあり得

ず、従って、信仰の自由も布教の自由もあり得ないと断定した上で、ウィリアムズは、自らの北米における厳しい開拓生活の体験を踏まえて、牧師は真の布教の自由を得るためには聖職禄に依存せず、その生計は信者の自由意志による據金、或いは、牧師自身の勤労によって確立すべきだ、と主張していた²⁷⁾。一方、フォックスが牧師を金で雇うことに反対したのは、それが信者自身の信仰上の覚醒の妨げになる、との理由からであった。両者共、牧師の職務は、権力や財力のある者に雇われて行く性格のものではないという共通認識を持っていたが、その理由は異なっていたと考えられる。

このようにフォックスとウィリアムズの思想には一定の範囲で共通性があるが、かなりの相違点も認められる。二人は、17世紀中頃の英国における宗教界・政界の変動の時期を生き、その中で両者とも急進的革新派と位置付けられる筈である。しかし、その枠内で、それぞれの教義・思想の根底にある違いが、二人の著書による論争の中で表面化してくるのである。この両者の対立の主な理由の一つは、年齢・世代の相違と二人が若い時に受けた教育の相違であると思われる。これについては、後で再び述べる。

5. フォックスに対するウィリアムズの挑戦

ロージャー・ウィリアムズは、ジョージ・フォックスがロード・アイランドを離れる前に公開討論の提案をした。ウィリアムズは、ニューポートに滞在中のフォックスに宛てた14項目の論題を明記した書状(1672年7月13日付)を副総督クランストン Cranston を介して届けようとした。クランストンに仲介を依頼したのは、この公開討論会の公正な進行について後援を期待したからであるが、この書状がクランストンに届けられたのは7月26日で、フォックスがニューポートを出港した数時間後であったと伝えられている。クランストンは後に、ウィリアムズの書状の日付が7月13日であること、配達されたのは26日であることを確認している。プロヴィデンスからニューポートまでは海路で1日行程であるから、この配達に要した日数の長さは不自然である。ウィリアムズは、この配達のを遅れをクェーカー派の陰謀(“Leger de main trick”)として非難したが、これは、ある程度、彼自身の軽率な行動が招いた結果とも言えるものである。ウィリアムズは、フォックスに宛てた挑戦状に記した14項目の論題の写しをプロヴィデンス入植以来の古い隣人であるジョン・スロックモートン John Throckmorton にも渡していた。その時期は、フォックス宛ての挑戦状を運ぶ船がプロヴィデンスを出航する前であり、また、スロックモートンがクェーカー教に傾斜していたため、

ウィリアムズが提案した公開討論会の内容は事前にクェーカー派に知られてしまった。スロックモートンは、早速、7月18日付でウィリアムズに宛てて「貴公の提案文書は下品で、嘘と悪口雑言と出鱈目で一杯だから公表を自粛するよう忠告する(“Thy Scurrilous Paper in thy Propositions to G. Fox. and others (who in scorn are called Quakers) I advise thee to refrain any further publishing thereof... thy paper being full fraught with impudent Lyes and Slanders, with high flown airy imaginations”)」という脅迫的な手紙を寄越した²⁸⁾。クェーカー派では、ウィリアムズと直接対決する討論で総帥「フォックス猊下」の威信が損なわれるのを虞れ、その失態を事前に避けるため、急遽ニューポートで秘密会議を開いて対策を協議した。そこで決したのは、ウィリアムズとの公開討論には古典語の学識もあるジョン・スタブズなどの論客を代理に立て、しかも、フォックスの面目を保つためウィリアムズから論争を挑まれていた事実を知らずにロード・アイランドを去ったとの口実を設ける目的で、その書状を仲介者クランストン副総督に届けるのを故意に遅らせるという謀計であった。この計略の実行は容易であった。書状を運ぶ船の船長がジョン・クロスマン John Crosman というクェーカー教徒で、秘密会議にも出ていて、教祖に論争を挑んだウィリアムズを「分別のない痴れ者(“Blind sot”)」と路上で面罵した人物だったからである。以上はウィリアムズの著書『巢穴からつまみ出されたジョージ・^{フォックス}狐』の記述であるが、参考のため、原文の一部を示す。

in the Junto of the Foxians at Newport it was concluded... that His Holiness G. Fox should withdraw, seeing there was such a Knot of the Apostles of Christ Jesus now at Newport together, (especially, John Stubs, a man knowing the Greek and Hebrew) Therefore that it might appear that such a Nehemiah as he would not fly, it was agreed that my Letters should not be delivered to the Deputy Governour, untill G. Fox was gone; so that it might be truly said, that he never saw the Paper which I sent unto him.²⁹⁾

この非難に対してフォックスは、副総督に託された挑戦状は受領していないことを強調し、ウィリアムズの主張は嘘で、提案された論題など見たこともない、と反駁した。フォックスの主張は内容の乏しい反復が多く、彼の著書『ニュー・イングランドの危険な火種』の最初の2ページだけで、この趣旨の文が8個も見られるが、そのひとつでは「フォックスがロード・アイランドに滞在

した数週間のうちにウィリアムズが接触を試みなかった不自然さ (“I never saw, nor knew that which R.W. writ, and sent to him. But which is strange, though G.F. was several weeks at Rode-Island, and at Providence (where it seems, this old Priest R.W. dwells) and in all that time he never spoke to G.F. nor writ to him of any such thing”)]を指摘して、ウィリアムズこそフォックスとの直接対決を恐れて避けていた、と具体的な反論をした³⁰⁾。

フォックスとの討論は実現しなかったが、ウィリアムズはロード・アイランド滞在中のクェーカー派を代表する論客、ジョン・バーネット、ジョン・スタブズ、ウィリアム・エドモンソンの三人を相手に公開討論会を開催することに合意した。日程は8月9日から3日間をニューポートで7項目を論じ、残り7項目の討論はプロヴィデンスで1日で行うことになった。ウィリアムズがクェーカー派との討論を望んだのは、彼自身の言葉によれば「信教の自由の大原則に則り犠牲を払ってまでクェーカー教徒を受け入れたロード・アイランド植民地が、彼等の教義まで幫助するものでないことを証明するため (“the vindicating this Colony for receiving of such persons whome others would not, we suffer for their sakes, and are accounted their Abettors”)]であった。彼は、別の動機として、前年にニューポートのクェーカー派の集会に乗り込んで論争を挑んだが妨害によって果たせなかったことと、フォックスとエドワード・バローの共著 *The Great Mystery of the Great Whore Unfolded* (London, 1659) (邦語仮題『暴かれた大いなる無節操者の奥義』)の序文にある討論の誘いに応じた (“I resolved to offer a fair and full Dispute, according to Ed. Burrowes (and therein G Foxes) Offer in his large Epistle to Foxes Book”) ことを挙げている³¹⁾。フォックスとバローは、この本の中で、クェーカー派に対する多くの文書による攻撃に反論し、特に当時のピューリタンの重鎮リチャード・バクスター Richard Baxter (1615-1691)、ジョン・オーエン John Owen (1616-1683)、ジョン・スタラム John Stalham (d. 1681) などの批判に反論しながら自説を述べているが、ウィリアムズは、そこに示されたフォックスの新興宗派としての教義を浅薄で学問的に未熟なものとして粉碎しようとしたのである。ウィリアムズは、フォックスの著書を携えて、討論の場に臨み、問題の箇所を逐一引用しながら論破を試みた。これは、謂わば「アカデミック」な方法と呼べるが、これに対するクェーカー側の対応の特徴は、ウィリアムズの言い分では、彼の発言中、しばしば、傍聴者を含め多数が讃美歌を斉唱したり、一斉に祈禱の文句を大声で唱

えて、討論を中断することであった。もう一つウィリアムズを辟易させたのは、声の大きなエドモンソンの長広舌で、ウィリアムズは十分な発言の機会を得られなかった。この不公平な進行に聴衆の間からも抗議があったが、討論会場で多数を占め、その主導権を握っているクェーカー派は聞き入れなかったとのことである。ウィリアムズは、事前に、討論の進行に関して相手側に、発言の機会を公平に保証することを要求していたが、それは無視されたい。この欲求不満も原因の一つになって、ウィリアムズは、この時の討論を紙上で再現して出版することでクェーカーに対する批判を広く公開したのである。彼は、この執筆を専ら記憶に基いて行ったが、記述には公平を期した (“to present the true substance of passages without advantage to my self, or disadvantage to my Opposites”) と言っている³²⁾。

このウィリアムズの著書は *The Complete Writings of Roger Williams*, Vol. V で503ページあり、その反論であるフォックス=バーネットの共著も第一部が233ページ、第二部が255ページの大冊であるが、その性格上、反復が多く冗長で、体系的な論文とは言い難い。これらの本は、内容的にも、クェーカーに関する教義問答として読むよりも、ウィリアムズのクェーカー派の教義に対する不信感と、そこに顕れた彼自身の思想の外面的特徴を示すものとして読むべきだ、との指摘もある³³⁾。本稿では、紙数の関係上14項目の論題のすべてを扱うことは不可能なので、その核心と思われる論題の第1項目を中心に考察することとする。

6. ニューポートとプロヴィデンスにおける公開討論

ウィリアムズは、ニューポートでの公開討論に赴くため、老骨に鞭打って単身で終日カヌーを漕いでナラガンセット湾を渡り、前夜遅く到着した (“God graciously assisted me in rowing all day with my old bones so that I got to Newport toward the Midnight before the morning appointed.”)³⁴⁾。討論は毎日午前9時に始まり夕刻に終わることになっていた。彼が予め書面で提案してあった14項目の論題の半分をニューポートで3日に分けて論ずる予定だったが、一日目は最初の1項目の論争だけで終ってしまった。それは、ウィリアムズの言によれば、クェーカー側の不公平な進行により時間が空費されたことと、当日の討論が彼の提案した論題の第1項目で「クェーカー教徒は、聖書の言う真に神を恐れおのく者ではない (“the People called Quakers are not true Quakers according to the holy Scriptures”)]という、クェーカー側にとって最も許し難い内容のものであった

からだ、と思われる³⁵⁾。

ウィリアムズは、「クエーカー」の名が「信仰告白の際に身体を震わせるという奇妙な行動から (“from that strange and uncouth proffessing of their bodyes, with quaking and shaking of their Bodyes even in publick Assemblies”)ベネット判事が付けた」と指摘し、この宗派の系譜の概略を述べた後、「クエーカー派の指導者の欺瞞の根源はその高慢な心 (“the old proud spirit”)であり、それがこの宗派の人々を惑わせ、偽りの教義、偽りの身震い、偽りの街頭説法に導き、喧騒派を生み、男女が街路や集会の場で人類の祖アダムと同じ裸形となるといふ奇怪な行動をさせ、遂には、不貞・姦淫などの忌まわしい罪を犯させているのだ (“I saw their foul spirit so transport them, not only in lying Doctrines, but lying Quakings and Tremblings, lying preaching through the Streets... untill their ugly child and Daughter Rantisme rose from their Bowels and practiced Nakedness of men and women in the Streets and in their religious Meetings, as Adamites... they fell into many uncleanesses and Adulteryes”）」と攻撃した³⁶⁾。また、ウィリアムズは、クエーカー教徒の身震いは、ダビデ、モーゼなどの「神に対する聖なる畏敬と懼れの心から来ると証明できる (“that may many wayes be proved to be the Soul and Spirit, out of a holy Aw and Dread of the Majesty of Heaven”）」身の震えとは異なり、「その異常な身の震わせ方は神の精霊や力から来るのではなく神に敵対する魔王サタンの霊と力によるものだ (“which extraordinary motions I judged to come upon them, not from the holy Spirit and Power of God, but from the spirit and power of Sathan”）」と決め付けた³⁷⁾。

このようなウィリアムズの攻撃に対してジョン・スタブズは『ピリピ書』第2章12節の「畏れおのの戦きて己が救いを全うせよ (Work out salvatson with fear and Trembling)」を引用して反論しようとしたが、ウィリアムズは、聖書の『ピリピ書』や『コリント書』に見られる「畏れおのの戦く」はクエーカー教徒の身震いとは無関係のものと斥け、「神のすべての御業を真似る悪魔が、ダビデやモーゼを真似た偽りの身震いを起こさせて、人間の神に対する真の畏れと戦きを捨てさせようとするのだ (“the Devill will be Gods Ape in most things: He subornes and substitutes a bastard Quaking and Trembling of the body in Imitation of David, Moses &c. on purpose to thrust out the true Fear and Trembling which ought to be constantly in us”）」と答えている³⁸⁾。

この討論会でスタブズと協力してウィリアムズと対決したバーネットは、この応酬を基にフォックスと共著で

『ニュー・イングランドの危険な火種は消し止められた』を出して、ウィリアムズの主張を殆ど「逐条的」に迎って反論を試みているが、この論題の本質に関する部分では具体的内容に乏しく、次に示すように、単に自己正当化の言辞を連ねているだけ、との印象を受ける。

R.W. The People called Quakers are not True Quakers according to Scripture.

Answ. The Lord God of Heaven and Earth knoweth, that thou speakest falsly of us here. And thou hast made a great Noise, but provest nothing; but hast brought several lies to prove thy own... For the same Word of God and Power, by which all things were made, have we known the Operation in our hearts of it, and Tremble at it; which thou hast not known: for if thou hadst, thou would'st not have brought this false Charge out against us.³⁹⁾

他方、これに付随した末梢的な問題では、反論はかなり具体的である。例えば「クエーカー」の名の由来は、「1650年、ダービーのベネット判事から投獄の判決を受けた時、同判事に向かってフォックス等が『神の言葉におののけ』と命じたことによる (“Gervase Bennet, Justice of Derby gave us that Name, because I and we bid him and his Company, Tremble at the Word of God, (in 1650, when he cast G.F. and others in prison.))」と主張し、通説を否定している。また、「クエーカー派から喧燥派が生れた」とのウィリアムズの見解に対しては「喧燥派の人々は神を畏れて静かになり、その多くがクエーカーに転向したのが事実であって、クエーカー派から喧燥派が生れたのではない。貴公がこの誤った考えに陥ったのは悪魔の仕業だ。 (“many of the Ranters are come to be Sober in the Fear of God, and are turn'd to the people called Quakers; but not the Ranters come from the Quakers, neither Are they their Daughter: this hath been the spirit of the Devil, that moved thee, and, not the Most-High.”))」と反論している。⁴⁰⁾

この論題についてウィリアムズは追及の手を緩めず、『イザヤ書』第66章2節「我はただ苦しみまた心をいため我がことばを畏れおののくものを顧みるなりと (“To this man will I look that is poor and contrite, and trembleth at my Word.”))」を引用して、フォックスの率いるクエーカー派の人々は「聖書に言う神の言葉におののく者とは程遠い (“so far from trembling at the Word of God in the holy Writings or Scriptures”))と断定し、その根拠として、クエーカー派の教義の中核である「内面に在る光

(“The Inward Light”)」に関する彼の強い疑念を表明している⁴¹⁾。その最も攻撃的な部分の文言は次の通りである。

is it not prodigious and monstrous Contempt that these holy Words, this holy Book and Writing of God should be so undervalued and slighted, yea vilified and nullified, if compar'd with their pretended new found Light within them, which was (say they) before the Scriptures, and gave forth the Scriptures, and therefore was above the Scriptures and therefore is not judged or tried by the Scriptures, but they by it. Yea, and this light must be in every one of mankind in the whole World: Hence it was that these holy Writings were so disused in their own private Readings, in their Publick Worship, and in their Families.⁴²⁾

(筆者 試訳)

この神の言葉、聖書が、彼等の内面に新たに見出されたと称する光に較べて、このように軽んじられ、卑しめられ、無視されるのは、実に異常で奇怪至極な恥ずべきことではないか。彼等の主張では、この内面に在る光は聖書より先にあり、聖書を著したのであるから聖書より上位にあり、従って、聖書によって裁かれるものではなく、聖書がこの内面の光によって裁かれるのだ、とのことである。それ故、彼等は個人で聖書を読まず、公的な礼拝でも、家族の中でも聖書を用いないのである。

このウィリアムズの批判は、聖書を神の言葉として信仰の拠り所としている伝統的ピューリタンの信条に基いている。彼にとって、聖書よりも「自己の内面に在る光」と称する客観性の乏しいものに権威を見出すフォックスの教義は到底容認できなかつた⁴³⁾。この「内面の光」と聖書の問題については、既に1650年代の英本国で、ジョン・スタラムがクェーカー派を攻撃する著作の中で、「各人の内面に在る光が聖書を著し、聖書を我々に教えるのも人の内面の光だと言い張るのは暗愚そのものであり、聖書の教えに反する (“To say the Light in every man gave forth Scripture, and will open Scripture to us, is palpable Darkness, and contradicts Scripture”）」と論評していた⁴⁴⁾。この批判に対してフォックスは『大いなる無節操者の奥義』の155ページで反論しているが、ウィリアムズはその箇所のフォックスの言辭“All be in utter Darkness and know not the Scripture, untill they come to the Light that every man was in that gave forth Scripture,...”を取り上げ、それを自分の英語にパラフレーズした上で、20世紀の人間が考え付くような疑問を提起して

いる。ウィリアムズの文言は次の通り。

The english of that Answer is, That every man, that is all Mankind Men and Women if they will, can give forth Scriptures, or write holy Scriptures: I know they call this Light, God, and Christ, and Spirit, the Covenant of God, the Life, Truth and Grace of God. I asked them in publick Since this Light comes into this World in and with all Mankind, whether it comes into them at the Conception, or at the Birth, or when else? Whether it was in all Mankind before the coming and death of Christ Jesus or whether to those that are in the world since his coming, or both? Whether it be in the Understanding, Will, Memory, Affections in any of them severally, or lodgd in all of them jointly?⁴⁵⁾

(筆者 試訳)

フォックスの答えは、あらゆる人間は、その気になれば、聖書を著し、聖書を執筆できるという趣旨である。フォックス等は、この「内面に在る光」を神、キリスト、精霊、神の契約、神の命・誠・恩恵などと呼んでいるが、私は公的な場で、次の質問をした。すなわち、この「光」がこの世に現れ、すべての人間の内面に、すべての人間と共に在るならば、その「光」が人間の内面に宿るのは、人間が母親の胎内に懐胎された時か、誕生の時か、それとも別の時か。その光はキリスト以前のすべての人間の内面に在ったのか、それとも、キリスト以後の人間だけに限られているのか、或いは、その両方に在るのか。「内面の光」は人間の理解力、意志、記憶力、愛情の中に別々に在るのか、それとも、それらの全てに併せて存在するのか。

このウィリアムズの疑念に対してフォックス＝バーネットは、「ウィリアムズのパラフレーズは、フォックスの文言を不当に曲解したもので (“a Gross Perversion of G. F's words”）」、フォックスは人間の意志で聖書ができたとは言っていない (“G.F. doth not say, The Scripture was given forth by the Will of Man”）」と弁明した上で、「内面の光」が人間の内面に宿るのは何時か、という愚かな質問 (“his Unlearned Question”）」については、ウィリアムズに『ヨハネ伝』第1章9節「もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり (フォックスの引用文は“Christ is the True Light, that lighteth every Man, that cometh into the World.”）」を読み、と突き放している。そして「キリストがこの真の光であり、それ故、この世に生れるすべての者が光で照らされるのは明白な事実であり、これを信ずる者は、その光が自分の心の内

に輝いていることを直接確かめて証言できるのだ (“So, it's Evident, ALL ARE LIGHTED, that come into the World: and the Believers witnessed it to Shine in their Hearts”）」と言っているが⁴⁶⁾、この答弁もウィリアムズの疑問にまともに答えているとは言えないであろう。

上のウィリアムズの質問は、フォックスの唱える人間の「心の内に輝く光」に宗教的権威を認めることは、人間を神と同列に置く不遜極まる思い上がりである、との確信から出ている。ウィリアムズにとって、人間の心は、神に譬えられる光を内に宿すような聖なるものではなく、虚偽と汚辱に塗れたものなのである。上に見られるフォックスの言葉と同じ“Hearts”を用いてウィリアムズは、人の心の罪深さを次の文言で表わしている。

our Hearts are so cunning and cheating that they will tell us that we have Light and Christ and God within us, and that we can speak and write holy Scripture, not remembering that (as Christ Jesus said of the Temple) our hearts are Dens of Thieves and (like painted Tombs) full of dead mens bones and rottenness, untill a second Birth by the Word and Spirit of Christ Jesus.⁴⁷⁾ (筆者 試訳)

我々人間の心は狡猾で他人を騙すようにできており、我々の内面には光やキリストや神が宿るとか、我々は聖書になる言葉を語り、聖書を執筆できるとか言いたがるのだ。その時、人間の心は（イエス・キリストが寺院について仰せられたように）盗賊の棲み家の如く荒れ果てたものであり、また（彩色を施した墓のように）死人の骨と腐肉に満ちた、汚らわしいもので、この人間の心の内側の荒廃と汚れは、キリストの真の御言葉と精霊によって再生するまで続くという事実が忘れられているのだ。

以上のような応酬が続いて初日は終わったが、日中に偶々日蝕が起きた。これについてウィリアムズは、討論の状況と関連させて、真のキリストの栄光は、偽の救世主、偽の預言者、異教徒等によって一時的に曇らされても、永遠の輝きの中に再び現れることを象徴する現象だ、とコメントしている⁴⁸⁾。

翌日、彼は前日の討論における孤軍奮闘で声が嘎れ頭痛もあったが、討論を続行した。論題は「クェーカー教徒が信ずると公言するキリストは真のキリストではない (“The Christ they profess is not the True Jesus Christ.”)」である⁴⁹⁾。この日は、キリストの肉体を備えた目に見える存在 (“His bodily visible Presence”) とその不可視的・霊的存在 (“His Spirituall, invisible Pres-

ence”) を巡る議論から始まり、ジョン・バニヤン、トマス・モアなど多くの聖職者、神学者の論評を引用しつつ討論が行われたが、エドモンソンの非常識な長広舌と横槍に加えてスタブズの即席の長い説法によってウィリアムズの発言が途中で幾度も妨害され、この論題だけで終わってしまった⁵⁰⁾。ここで注目されるのは、ウィリアムズが歴史上実在したイエス・キリストの生誕、磔刑、復活などの預言を文字通り信じていることを明言し (“I said all those Prophecies... were exactly, literally, and punctually fulfilled in and upon that Individual Person: so that ...there is such an exact material and literal Harmony between the Prophecies and the historical Narration of his Birth, Life, Death, Resurrection, &c”), クェーカー派の「キリスト」は実体のない空想の産物だ (“their Christ was but half a Christ, a Light, an Image or Picture or Fancy of a Christ made up of the Godhead and their flesh, I said they had set up a Christ within them which was but an Imagination, an Image, a Christ in the mystical Notion: but in reality Nothing”) と決め付けていることである⁵¹⁾。

討論の三日目は月曜 (the second of the Week) だったが、その朝、予定の論題が5項目も残っていると理由で、エドモンソンはウィリアムズの発言を一つの論題について15分に制限することを一方的に要求してきた。これに対してウィリアムズは、ニューポートの学校教師である実弟ロバートが会場の全員に向けて朗読するように彼に託した公開状を読み上げることを提案した。その公開状は、挑戦者 (“The Complaining Disputant”) であるウィリアムズに対しては、クェーカー批判は公開の場で行う前に二度程「非公開で (“in private”)」行うべきであったこと、「論題を欲張り過ぎたため批判が甘くなっている (“you have assumed and presumed too much, being so large and high proposals, which do appear unto me not as charges,”)」と指摘している。弁護側 (“the Defending Complainants”) であるクェーカー派に対しては、この二日間の討論の不公平な進行と空論の反復による (“by your often Iterations, Tautologies, Indecorum Behaviours and Expressions, with improper Preachments”) 時間の空費に抗議し、老齢の兄ロージャー・ウィリアムズに対する彼等の非礼 (“Your Indecorum Behaviours both in words and gestures unto your elder Fellow-Servants & aged Father”) と兄の繰り出す実質的な裏付けのある証拠と実証的で際立って論理的な議論を理解しようとしないう (“would not be satisfied with his substantial Proofs, divine Reasons and Argumental Demonstrations”) 頑迷さを指摘するものであった。この

朗読の提案はエドモンソン等に反対されたため、ウィリアムズは会場がプロヴィデンスに移った時に再提案することとした。(プロヴィデンスでも、この提案について聴衆の意見が分かれたため、討論続行を優先するウィリアムズは弟の公開状の朗読を断念し、自著『巢穴からつまみ出された狐』^{パロックス}に全文を掲載し世間に公開した⁵²⁾。)

この日の最初の論題は「クエーカー派の人々を動かす霊は真の神の霊ではない(“The Spirit by which they are acted is not the Spirit of God.”)」であった。ウィリアムズは古典語の学識を駆使して、“Spirit”の語源を説明し、この語は「息 (breath)」や「風 (wind)」を意味する場合があります、それが神、天使、人間についても用いられ「肉体とは別の目に見えない霊的な強い純粋なもの(“a spiritual, powerful, invisible fine Substance distinct from flesh and earthly Bodies”)」を意味するようになった、と説き始めた⁵³⁾。残りの論題は、クエーカー派が聖書を認めず(“do not own the holy Scriptures”), その信条と信仰告白(“Principles and Professions”)が矛盾と偽善(“Contradictions and Hypocrisies”)に満ち、その信仰は異端(“Heresy”)で、雑多な宗旨の寄せ集めである(“a confused mixture of Popery, Armineanisme, Socineanisme, Judaisme, & c.”)という内容であるが、それ等を一気に片付けてニューポートでの討論会を終った。ウィリアムズが退出する時、会場を埋めたクエーカー派の人々は一斉に「あの男は何も証明できなかった(“He hath proved nothing.”)」と叫んだが、それを聞いた彼の弟ロバートの妻でニューポートのバプティスト派に属するエリザベスが「この人は自分の信念を吐露したのです(“The man hath discharged his Conscience.”), そして、あなた方に対する批判として証明しようとしたことを全て完全に証明したのです(“He hath fully proved what he undertook to prove against you.”)」と大声で言い返した。これはウィリアムズが記録している出来事であるが、心身共に疲労困憊した彼にとっては救われる思いであったであろう⁵⁴⁾。

まだ残っている7項目の論題についての討論は8月17日にプロヴィデンスで行われた。ここは、ウィリアムズが自ら創設した本拠地で、古い仲間のバプティストもあり、クエーカー派が圧倒的多数を占めるニューポートでの討論に比較して、彼に好意的な発言もあった。古参のトマス・オルニー Thomas Olney は、ロバートの公開状の朗読を提案したウィリアムズを支持する動議を出したし、ウォリック・タウンの創設者で特異な論客であるサミュエル・ゴートン Samuel Gorton (c1592-1677) が、高齢にも拘らず顔を見せ、最初の論題に関連してスタブズとの間で若干の応酬もあった⁵⁵⁾。この論題は「クエーカー

一派には、事実上、神もキリストも霊も天使も悪魔も復活も審判も天国も地獄もないに等しく、在るのは人間に備わったものだけだ(“The People called Quakers in Effect hold no God, no Christ, no Spirit, no Angel, no Devil, no Resurrection, no Iudgement, no Heaven, no Hell, but what is in man.”)」である。この論題は、ウィリアムズによれば、クエーカー派が神やキリストなどを言葉の上では一応認めながらも、彼等の著作、特にジョージ・フォックスの著作を子細に吟味すると、或る箇所では信ずると公言しているものを別の場所では放擲している(“what they professed in one place they overthrew in another.”)という事実から出ている⁵⁶⁾。

この日の討論でも、ウィリアムズは自分の見解を、専らフォックス等クエーカー派の著作を論拠にして力説した。この日の予定の論題は、クエーカーの信者に要求される資格基準の安易さ(“All that their Religion requires (externall and internall) to make Converts & Proselytes, amounts to no more than what a Reprobate may easily attain unto, and perform.”), 彼等の高慢はプロテスタントの敵ローマ法皇も顔負けであること(“The Popes of Rome doe not swell with, and exercise a greater Pride, then the Quakers Spirit hath expressed...”), 彼等の信仰が人の魂の救済の妨げになること(“obstructive and destructive to the Conversion and Salvation of the Souls of People”), 彼等の苦難はその信仰の正しさの証明にはならないこと(“The Sufferings of the Quakers are no true evidence of the Truth of their Religion.”), 彼等の著作は大袈裟な表題や大言壮語を用いているにも拘らず内容に実質が伴わないこと(“extremely Poor, Lame, Naked, and sweld up only with high Titles and words of Boasting and Vapour”)であって、ここまでは宗教の領域の問題である。

しかし、最後の第14項目の論題は、クエーカーの信仰(“the Spirit of their Religion”)が俗界との関連で惹き起す危険性のある四つの問題を指摘している。それは(1)人を礼節から野蛮な不作法に引き戻す(“to reduce Persons from Civility to Barbarisme”), (2)気まぐれの政治を行い、布告や指令を衝動的に発する(“an Arbitrary Government, and the Dictates and Decrees of that sudden Spirit that acts them”), (3)反対派の人民、君主を抹殺する(“a sudden cutting off of People, yea of Kings and Princes opposing them”), (4)世界の歴史上前例のない悲惨な宗教上の迫害もたらす(“as fiery Persecutions for matters of Religion and Conscience, as hath been or can be practised by any Hunters or Persecutors in the world”)危険性である⁵⁷⁾。この最後の論題は、ロ

ード・アイランド植民地でクェーカー派が多数を占め、その政権の中枢にも勢力を拡大しつつあった当時の状況の中で、40年前に彼を追放したマサチューセッツを連想したウィリアムズの危機感と焦燥感を反映していると考えられる。

7. 結 語

以上、ロージャー・ウィリアムズとクェーカー派との対立の概略を、主としてウィリアムズの著書に基づいて述べたが、予期せぬ誤りがあるかも知れぬ。読者の方々の御批正をお願いする次第である。ウィリアムズがフォックスに論争を挑んだ最大の理由は、クェーカー派の教義の中核である「内面の光」の神格化に深い疑念を抱いたことによる、と考えるのが当然であろう。このウィリアムズの批判を象徴するのはプロヴィデンスでの討論の始めに見られる文で、それは「フォックスの言説は、詳細に検討すると、『クェーカー教徒は力と栄光において父なる神、神の子イエス、それに精霊とも同等だと言っている』（“The Quakers say that they are equal in power and Glory with God the Father, Son, and Holy Spirit”）のに等しいのではないか」である⁵⁸⁾。このウィリアムズとフォックスの信条における相違については、ウィリアムズが聖書に集約されたキリストの教えに忠実な伝統的ピューリタンであったのに対して、当時、新興宗派であったクェーカー派は聖書を含む権威や基準に拘束されず、かなり過激で自由な試みをしていた、という見方がある⁵⁹⁾。

また、フォックスとウィリアムズの間には、学問に対する態度と論理の堅固さに相違があったと思われる。ウィリアムズは、渡米以前の青年期（1620年代）に名門ケンブリッジ大学ペンブローク・カレッジに学び、特に、古典語、外国語に通暁していた。それ以前には、星室庁裁判所で速記係を勤めた経験があり、彼の才能を発掘した大法律家サー・エドワード・クック Sir Edward Coke (1552-1634) の薫陶を受け、実証的な討論、現実的な論理構成などの修練を積んでいた。ウィリアムズは、神の教えを真に理解するためには真摯な学問的努力が必要だと言っているが、彼の目には、フォックスの言説が学問の伝統から逸脱しており、大衆に情緒的にアピールする面はあっても、直感に安易に頼り過ぎて論理が弱く、恣意的で、神意の理解からは程遠いものと映ったのであろう⁶⁰⁾。

ウィリアムズは、宗教と政治の接点では、政教分離と信仰の自由の原則を1630年代に実現した先駆的な人物であるが、フォックスの率いるクェーカー教徒と対決した1670年代には、ピューリタンの伝統の中で旧守派と見ら

れる立場にあったと考えられる。彼がニューポートの討論会場でしばしば“Thou old Man”と嘲笑されたのは70才に近い老軀のためだけでなく、その思考と言説が余りにも学術的・古典的で、教育水準と世代が異なる大衆から疎まれていたのが理由だと推測される。彼はクェーカー派との討論でもその学識の一端を示したように、開拓途上の北米英領植民地での長年の労働の傍ら、神学研究における先達の著作を謙虚に学び、自らも著述に励む学究であった。他方、ニューポートに多数居住したクェーカー派の中にはウィリアムズに比肩できる大学教育を受けた人物はいなかった筈である。彼等の「教祖」フォックスはウィリアムズよりも一世代若く、しかも、「オックスフォードやケンブリッジの教育を受けただけではキリストに仕える聖職者の資格にならない（“Being bred at Oxford or Cambridge was not enough to fit and qualify men to be ministers of Christ.”）」という啓示を若い頃（1646年）に受けた、と日記に書いているのである⁶¹⁾。これは、ピューリタン革命の変動期を経て、宗教界における大学の地位が低下し、神学が「大衆化・自由化」して大学卒業資格が無くても説教や神学論文の執筆ができるようになったことを反映していると考えて良いであろう。このように時代の動向が変化し、クェーカー派などの新住民が多数流入するとともに、地域住民の世代交代が進み意識も変化しつつあったロード・アイランド植民地で、多年の風雪に耐えて長寿を保ったロージャー・ウィリアムズの晩年の生活は孤独で不遇であったと伝えられている。彼が老軀に鞭打って、自分の息子の世代に属する壮年のクェーカー派の論客と渡り合った討論会の状況は、大衆に迎合せず入植以来の古い仲間の一部から裏切られ、過去の功績も忘れられた、開拓地のインテリ老人としての彼の孤高の姿を一層際立たせている。

註

- 1) ウィリアムズの *George Fox Digg'd out of his Burrowes* は J. Lewis Diman (ed.), *The Complete Writings of Roger Williams*, Vol. V (New York, 1963) に拠った。フォックスの *A New-England Fire-Brand Quenched* は University Microfilms International (Ann Arbor, Mich., U.S.A.) のファクシミリ版を用いた。
- 2) John Russell Bartlett (ed.), *Records of the Colony of Rhode Island and Providence Plantations in New England*, Vol. I (Providence, 1856), pp. 156-157.
- 3) Cf. Horatio Rogers et al. (eds.), *The Early Records of the Town of Providence*, Vol. I (Providence, 1892), p. 1; 拙稿「英領ロード・アイランド植民地によるチャールズ二世の特許状の取得」『東京工芸大学芸術学部紀要』Vol. I (1995年), pp. 72-73.

なお、ウィリアムズがプロヴィデンスの統治形態についてウインスロップの助言を求めた書簡（発信は1636年8月下旬

- 以前と推定)があるが、それについては次を参照：Glenn W. LaFantasie (ed.), *The Correspondence of Roger Williams*, Vol. I (Hanover and London, 1988), pp. 53-57; Allyn Bailey Forbes (ed.), *Winthrop Papers*, Vol. III 1631-1637 (Boston, 1943), pp. 296-298.
- 4) Cf. *Records of R.I.*, Vol. II (Providence, 1857), p. 129; W. Noel Sainsbury (ed.), *Callendar of State Papers, Colonial Series, America and West Indies, 1661-1668* (London, 1880), p. 343; & Carl Bridenbaugh, *Fat Mutton and Liberty of Conscience: Society of Rhode Island, 1639-1690* (Providence, 1974), p. 56.
 - 5) 上記拙稿及び *Records of R.I.*, Vol. II (Providence, 1857), pp. 5-6 を参照。
 - 6) 1665年の調査によると、四つのタウンの自由公民 freeman の人数はニューポート96, ポーツマス71, プロヴィデンス42, ウォリック37とのことである。自由公民は世帯主であると推定できるので、総人口も上の数字に比例していた、と考えてよいであろう。William G. McLoughlin, *Rhode Island: A Bicentennial History* (New York, 1978), p. 34.
 - 7) John Wheelwright, "A Fast-Day Sermon," David D. Hall (ed.), *The Antinomian Controversy, 1636-1638: A Documentary History* (Middletown, Conn., 1968), pp. 161-164; 及び、大木英夫著『ピューリタニズムの倫理思想』(新教出版社, 1966年), 181-193及び205-212ページを参照。
 - 8) Edmund S. Morgan, *The Puritan Dilemma: The Story of John Winthrop* (Boston, 1958), pp. 136-142; J. Franklin Jameson (ed.), *Winthrop's Journal 1630-1649*, Vol. I (New York, 1908), pp. 208-211.
 - 9) J. Lewis Diman, "Introduction" to *The Complete Writings of Roger Williams*, Vol. V, pp. viii-ix.
 - 10) Stephen F. Peckham, "Richard Scott and His Wife Catherine Marbury, and Some of Their Descendants," *The New England Historical and Genealogical Register*, Vol. LX (1906), pp. 169-170.
 - 11) George Fox and John Burnyeat, *A New-England Fire-Brand Quenched. The Second Part. Being Something in Answer to Roger Williams his Appendix* (London, 1678), pp. 247-249.
 - 12) David Pulsifer (ed.), *Acts of the Commissioners of the United Colonies of New England*, Vol. II, 1653-1679 (Boston, 1859), pp. 155-156.
 - 13) *Ibid.*, Vol. II, p. 158.
 - 14) *Ibid.*, Vol. II, p. 212.
 - 15) Charles Francis Adams, *Three Episodes of Massachusetts History*, Vol. I (New York, 1965), p. 408; *Ibid.*, Vol. II, pp. 548-551; Nathaniel B. Shurtleff (ed.), *Records of the Governor and Company of the Massachusetts Bay in New England*, Vol. IV, Part I, 1650-1660 (Boston, 1854), pp. 383-386, & 419.
 - 16) *Acts of the Commissioners of the U.C.N.E.*, Vol. II, p. 181.
 - 17) *Records of R. I.*, Vol. I, p. 377.
 - 18) *Ibid.*, Vol. I, pp. 378-380.
 - 19) *Ibid.*, Vol. I, pp. 396-398; 及び、上記拙稿『東京工芸大学紀要』Vol. I, pp. 67-68 を参照。
 - 20) *A New-England Fire-Brand. The Second Part*, p. 248.
 - 21) J. Lewis Diman, "Introduction," to *The Complete Writings of R. W.*, Vol. V, pp. x-xi. この使節団の目的は、ニュー・イングランドの各植民地の実情調査とチャールズ二世の新政権への支持を確保することで、カートライトは軍人で主要メンバーの一人。Cf. *Callendar of State Papers, Colonial Series*, 5, 1661-1668, pp. 199-201.
 - 22) H. Larry Ingle, *First Among Friends: George Fox and the Creation of Quakerism* (New York, 1994), pp. 233-234.
 - 23) Rufus M. Jones (ed.), *The Journal of George Fox* (Richmond, Indiana, 1983; Reprint of 1908 ed.), pp. 491, 498, 504-506.
 - 24) *Ibid.*, pp. 507-508.
 - 25) *Ibid.*, pp. 501 & 507. なお、英本国の使節団の記録(1665年12月)に次の記述がある: they have not any places set apart for the worship of God, there being many subdivided sects, they cannot agree to meet together in one place, but according to their several judgments. Cf. *Records of R. I.*, Vol. II, p. 129, & also *Callendar of State Papers, Colonial Series* 5, p. 343.
 - 26) *The Journal of Fox*, p. 508.
 - 27) Roger Williams, *The Hireling Ministry None of Christs, or a Discourse touching the Propagating the Gospel of Christ Jesus* (London, 1652). Perry Miller (ed.), *The Complete Writings of Roger Williams*, Vol. VII (New York, 1963), pp. 147-191.
 - 28) *The Correspondence of R. W.*, Vol. II, p. 654.
 - 29) *The Complete Writings of R. W.*, Vol. V, p. 6.
 - 30) *New-England Fire-Brand*, 1st Pt., p. 2.
 - 31) *The Complete Writings of R. W.*, Vol. V, pp. 2-3, & 40.
 - 32) Roger Williams, "To the People called Quakers," *The Complete Writings of R. W.*, Vol. V. [ページ番号なし]
 - 33) Cf. Edmund S. Morgan, *Roger Williams: The Church and the State*, (New York, 1967), pp. 56-57.
 - 34) *The Complete Writings of R. W.*, Vol. V, p. 37.
 - 35) *Ibid.*, Vol. V, p. 41.
 - 36) *Ibid.*, Vol. V, pp. 41 & 43.
 - 37) *Ibid.*, Vol. V, pp. 41 & 44.
 - 38) *Ibid.*, Vol. V, p. 46. ここに引用された『ピリビ書』の文言はピューリタンが良く用いたと言われる『ジュネーブ聖書』(1560)のものではなく、『欽定英訳聖書』(1611)のものとなっている。それは、ウィリアムズがこの自著をチャールズ二世に献呈している事実と関係していると思われる。なお、もう一箇所ウィリアムズが言及しているのは『コリント後書』第7章15節と思われる。その『欽定英訳聖書』の文言は次の通りである。
And his inward affection is more abundant toward you, whilest he remembreth the obedience of you all, how with feare and trembling you receiued him.
 - 39) *New-England Fire-Brand*, 1st pt., p. 27.
 - 40) *Ibid.*, 1st pt. pp. 26-27.
 - 41) *The Complete Writings of R. W.*, Vol. V, p. 49.
 - 42) *Ibid.*, Vol. V, p. 49. このページで"gave forth the Scriptures..."で始まる10語が重複しているが、誤植と思われるので、この引用文からは削除した。
 - 43) Cf. E. S. Morgan, *Roger Williams.*, p. 59.
 - 44) スタラムの文言は *The Complete Writings of R. W.*, Vol. V, p. 54 に引用されているものである。彼のクェーカー批判の著書のうちでフォックスが反論で取り上げたのは *The Reviler Rebuked, or a Reinforcement of the Charge against the Quakers* (London, 1657) という本であったと思われる。Cf. *The Dictionary of National Biographies*, s.v. "Stalham, John."
 - 45) *The Complete Writings of R. W.*, Vol. V, pp. 54-55 & also pp. 329-330.
 - 46) *New-England Fire-Brand*, 1st pt., pp. 31-32.

- 47) *The Complete Writings of R.W.*, Vol. V, p. 55.
- 48) *Ibid.*, Vol. V, p. 64.
- 49) *Ibid.*, Vol. V, pp. 4 & 65.
- 50) See *ibid.*, Vol. V, pp. 76-107.
- 51) *Ibid.*, Vol. V, pp. 69-70; cf. also Edwin S. Gaustad, *Liberty of Conscience: Roger Williams in America* (Grand Rapids, Mich., 1991), pp. 182-183.
- 52) See *The Complete Writings of R. W.*, Vol. V, pp. 111-117.
- 53) *Ibid.*, Vol. V, p. 118.
- 54) *Ibid.*, Vol. V, p. 213.
- 55) *Ibid.*, Vol. V, pp. 217 & 220.
- 56) *Ibid.*, Vol. V, pp. 218-219.
- 57) *Ibid.*, Vol. V, p. 5.
- 58) *Ibid.*, Vol. V, p. 226.
- 59) E. S. Gaustad, *op. cit.*, pp. 180-181.
- 60) *The Complete Writings of R. W.*, Vol. V, p. 147; cf. also David S. Lovejoy, "Roger Williams and George Fox: The Arrogance of Self-Righteousness," *The New England Quarterly*, Vol. LXVI (1993), pp. 222-225; L. Raymond Camp, *Roger Williams, God's Apostle of Advocacy: Biography and Rhetoric* (Lewiston, N.Y., 1989), p. 185.
- 61) *The Journal of G. Fox*, pp. 74-75. なお、ウィリアムズ自身も、人文科学・古典語・外国語などの学問と、それを教授する大学の価値と重要性を指摘しながらも、大学は聖職者の独占的養成機関ではなく、キリストに仕えるためには大学の神学の学位 ("the Divinity or (Godliness) degrees of Universities and Colledges") は必要条件ではない、と『雇われ牧師論』の中で言っている。Cf. *The Complete Writings of R.W.*, Vol. VII, pp. 169 & 190.